

アダルトコンテンツに求める禁忌性と子ども時代の抑制体験の関連 —G・バタイユ『エロティシズム』に基づいて—

前田 華子

近年のインターネットの普及により、人々がアダルトコンテンツに触れる機会は増加している。またその内容自体も様々な需要に応え多様化し、強姦ものや獣姦ものなど、何らかの禁忌破りを含むコンテンツも多くみられる。禁忌破りを描いたアダルトコンテンツを好む消費者は、アダルトコンテンツ内で描かれる禁忌破りに対しどのような要素を求め、どのように性的な満足感を得ているのか。そのことに興味を持った。

バタイユ（1897-1962）は『エロティシズム』（1957=1997）において禁忌破りと性的刺激の繋がりを論じたが、これを実証している研究はない。本研究ではこれらの繋がりを、質的調査を通して考究する。手がかりとしてまず、禁忌破りのジャンルを17項目に選定した。これに基づき、半構造化インタビューを行った。その上で、法的禁忌、宗教的禁忌、倫理的禁忌全てに対する意識が弱まる現代社会の中でのアダルトコンテンツ消費者にとっての禁忌意識の由来を、調査対象者が子ども時代に受けた抑制に注目して分析した。

5名にインタビューした結果、子ども時代に何らかの強い抑制を受けている調査対象者は、禁忌破りを描いたアダルトコンテンツを好む傾向にあるが、ほとんど抑制を受けなかった調査対象者は、好まない傾向にある。なお、何らかの禁忌破りを描いたアダルトコンテンツを好む調査対象者は、性的な満足感を禁忌破りそのものから得ているわけではない。例えば、ある調査対象者がアダルトコンテンツにおいて複数の禁忌破りのジャンルの描写を好む理由は、女性が清純さや一途さを失うときの「喪失感」に集約される。このように、禁忌破りの描写によって生まれる二次的な要素を楽しむことこそ、閲覧の主目的になっている。そのため、アダルトコンテンツ内の禁忌破りをあくまでフィクションとして考え、現実のものとは別と捉える。一方で、禁忌破りを描いたアダルトコンテンツをあまり好まない調査対象者は、フィクションとして描かれる禁忌破りを現実と同様の目線で見ると、独自に性におけるルールやポリシーを設け、禁忌破りを含むアダルトコンテンツを閲覧しないための彼らなりの合理的な理由をあえて自ら生み出している。その一例として、「誰かが悲しい思いをする性行為を自分は受け入れるべきではない」が挙げられる。

このように、彼らは自らのルールやポリシーとして社会的通念とされる程度の道徳的な教えを取り込み、それを禁忌としている。他方、子ども時代に何らかの強い抑制を受けた調査対象者は、その外的要因である家庭や学校から解放された状態においては、主体的に何が禁忌か判断できない。それは、彼らが抑制によって満たされなかった欲求を、アダルトコンテンツを通して満たそうとするためであると考えられる。

以上、禁忌が弱まった現代においても、子ども時代の抑制と現在求める性的刺激は関連する。よってアダルトコンテンツにおいて禁忌破りと性的刺激の繋がりは実証された。

（指導教員 後藤嘉宏）